

梅鶯仏教壮年会報

第126号
2015年
7月19日

次回例会

七月二十六日(日)

夕刻5時～6時半

『浄土真宗のみ教え③』

《**真実の教え**》

平成二十七年行事予定

5月31日(日)	例会(5時半)
6月6日(土)	法輪寺永代経法要
7月26日(日)	例会(5時半)
9月(未定)	親睦旅行
11月28日(土)	報恩講
12月30日(水)	除夜会
1月30日(日)	例会(5時半)
3月26日(土)	総会・役員会

蝶は、花を求めて舞い、
花は、蝶を待って咲く。

そのように！
すべてのものは他者との
かわりにおいてこそ、
自らを活かして生きられる。

寺川幽芳先生「こころの掲示板」より

ご挨拶申し上げます

副会長 田中直樹

暑さ厳しい折、皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、梅鶯仏教壮



年会が結成され、早いもので12年目を迎えました。

創設以来、名ばかりではございませんが在籍させて頂き、多くの出会いが出来たと感謝致しております。

反面、なかなか例会など、参加することが出来なくて申し訳なく思っております。

さて、今回総会で、前回に引き続き副会長に任命されました。今年で4年目になります。

力不足ではございますが、新の役員さんと共に、梅鶯仏教壮年会を盛り上げて行きたいと思っております。

どうかご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

合掌

高齢化社会に向けて、団塊の世代が65歳に到達し、日本はいま、加速度的に高齢化社会が進んでいます。平成13年には、高齢化率が29.1%に達し、ほぼ3人に1人が高齢者となります。寿命が伸びたことや、子供を産むことが少なくなったり、少子高齢化という社会構造が、少子高齢化と、そのスピードが異常に速いために、社会制度等の対策が、ついていない切迫した状況が、大変深刻な問題となつています。

同時に高齢者自身も、自分の人生をどのように送るのかを真剣に考えることが求められています。誰もが避けられない「老い」と「死」を、受けて生きていくという課題が、問われています。

しかしながら、老いとか死といった宗教的な問題に目を向けてこなかった戦後教育が、今、大きな転機となつてきているように思えます。

そんな中で私達が、梅鶯仏教壮年会の参加を願っています。住職

題材法話

前号からのつづき

一神教には、大きくユダヤ教、キリスト教、イスラーム教、この三つの宗教があり、もと兄弟の関係であり、神さまも同じで教えも共通し、たことが多いためですが、歴史的にこれを繰り返してきて立し、争いを繰り返してきて

何故でしょう。

「一神教」間の対立

「ユダヤ教」からは、ユダヤ民族のための教えをイス・キリスト教があり、逆に「キリスト教」からは、十字架に掛けたのはユダヤ人だとの思いがあり、互いに互いを認められないところがあるようにです。さらに「イスラム教」からみれば、神さまが言い残したことを全て伝えたのがムハンマドの「コーラン」であるから、教えそのもの、最高のものを、だとも主張します。そういったことを



背景に、「自分たちの正しい信じる神こそが唯一の正しい神である」とそれぞれの宗派が主張し始めると、他の人達という神は「間違った神だ」ということになってしまいうのですね。「一神教」の危うさがあります。自分たちの神を信じない者は「救われぬ者」だけならまだ良いのですが、それにとどまらず、その者は「神の敵」と見なし、「この世に存在してはならない者」に地獄に堕ちなければならぬ「悪い」とするのです。ここに恐ろしさがあります。このことは三つの宗教間だけの問題にとどまらず、実は同じ「イスラム教」の中においても、同じ争いが起きてしまうのです。イスラム教には大きく、「シーア派」と「スンニ派」とがあります。この両派の違いは、ざっくりと申しますと、イスラム教のムハンマド以降の指導者を「カリフ」と呼び、



「シーア派」は、そのカリフは「ムハンマドの子孫でなくてはならない」と考える人達で、スンニ派は、「皆から選ばれた者がカリフにならなければならない」と主張してきた人達です。その違いが、互いに殺戮しあうほどの問題なのかと思ってしまうのですが、「自分たちの神こそ正しい、自分たちの教えこそ正しい」と主張し合うことが、次第に様々な面での対立関係をもたせざるを得ません。もちろん政治的に利用されてきたという側面も大きいのですが、やはり一神教としての危うさが利用されてきたのであろうかと思えます。



○仏さまの教え

これに対して、仏教が説くところはまったく違います。仏教では、世界を創造したり支配するようない神、この世界の仕組み、人間や動物や自然が、互いに深くつながりつつ、相より

相助け、相支えあっているのだと教えます。また、すべての存在は、お互いに、他者を尊重し、つ、他者の存在を認めなければ、自分の存在もあり得ないんだと説きます。ですから、仏教の歴史では、仏教のために争いになったというものは、一度もありません。どんな宗教とでも共存できる寛容性が仏教の教えにはあるのです。今、世界の平和を考えるとき、仏教の教えが本来に大事なのではないかと思えます。それはけっして仏教を世界の人々に押しつけるというのではなく、仏教的なもの、考え方が、どんな宗教とでも、どのような社会においてでも受け入れられる寛大さがあるからです。

2014年度総会

住職法話より

